

## 〈規則に従うこと〉について：共同体説の可能性を 探る

篠原，成彦

<https://doi.org/10.15017/1430727>

---

出版情報：哲学論文集. 27, pp.133-150, 1991-09-20. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# 〈規則に従うこと〉について

——共同体説の可能性を探る——

篠原成彦

1

〈規則に従うこと〉について

人が言葉の意味を理解しているとされる時、彼に備わっているのは、言葉その使用の規則に従った仕方でも適用してゆく能力である。だがそれでは、規則に従っているとは実際どういうことなのか。人が言葉の適用において規則に従っていることを、我々はどのようにして認知するのか。——こうした問いにどう答えるかという問題の奇妙なまでの難しさを最初にはつきり認識し、自らそれに解答を与えるべく考察を進めたのは、『哲学探究』や『数学の基礎』におけるウィトゲンシュタインであった。そして、ここ十年近く、彼のその考察の検討を中核として、この問題を巡る論議が、現代哲学の一角に活気を与え続けてきた。こうした動きの火つけ役となったのは、〈規則に従うこと〉に関する懐疑論的議論を『哲学探究』に読み込む解釈によって、一大センセーションを巻き起こしたクリプキ<sup>(1)</sup>であった。

ワイトゲンシュタインに懷疑論を帰したことに於いて、クリプキの議論はワイトゲンシュタイン解釈として失敗している、との評価を下す論者は多い。たとえばマルコムもその一人である。けれどもマルコムは、或るきわめて基本的な点で、クリプキと見方を共有している。<sup>(2)</sup> すなわち、両者はともに、ワイトゲンシュタインが「規則に従うこと」に関して「共同体」と呼ばれ得る見解を採っている、と考えているのである。共同体説とは、人が或る規則に従っているということは、その規則を共有する成員からなる共同体に彼が属するということなしには成立し得ないのであつて、それゆゑ、共同体から切り離して考えられた個人については「規則に従う」という観念を適用することはできない、とする見解である。(マルコムはまた、ワイトゲンシュタインのいわゆる私的言語批判を、共同体説から導かれる一つの帰結と考える点においてもクリプキに同意している。<sup>(3)</sup>) 実際、この二人のほかにも、ライト、<sup>(4)</sup> マクダウェル、<sup>(5)</sup> ピーコックなど、ワイトゲンシュタインに共同体説を帰す人、そしてまた、共同体説はそれ自体として正しいと考える人は少なくない。彼らはそれぞれ、共同体説のあり方について少なからず異なった見解を持ち、複雑なかたちで相互に対立し合っている。

しかし他方、たとえばベイカー & ハッカー<sup>(7)</sup> やマクギン<sup>(8)</sup> は、ワイトゲンシュタインはそもそもどんなかたちの共同体説も採つてはいないし、その点においてワイトゲンシュタインは正しい(すなわち、およそ共同体説は正しいものではあり得ない)、と主張する。また、説得力のある共同体説批判を提示した人として、ブラックバーン<sup>(9)</sup> の名をあげることもできる。

要するに、ワイトゲンシュタインは共同体説を採っていたのか否かということも含めて——実際困つたことに、彼が我々に残したテキストはいずれの読み方をも難なく受け入れてしまふ<sup>(10)</sup>——、「規則に従うこと」については、定説と呼ばれるようなものは与えられていない、というのが現状なのだ。そして、このように、ここで人々の意見が大きく分かれてしまふというところ、すなわち、誰もが自然に賛同するような解答がすんなり出てこないということは、言語理解というきわめて日常的な観念について、我々は定かな了解を持っていなかったというパラドキシカルな事実を露わにしているのであつて、ゆゆしき事態でもあり、またそれが、この問題が人々の関心を引きつけて止まないゆゑんでもある。

人は単独では規則に従い得ないということを認めよ、との共同体説の要求は、最良目に見ても常識に逆うところのないものとは言えない。むしろ、常識に対する挑戦と言ったほうがいいくらいだ。だから、この要求が誤りであることを示すことに使命感を持って取り組む人がいるのも無理からぬことであるし、そうした「不健全な」要求をワイトゲンシュタインが行ったはずはないと考える人がいるのも、また無理からぬことである。そして、反論者達の批判を、共同体説の論者達は決してきれいにかわし得ているわけではない、というのも事実である。だが、それにもかかわらず、共同体説は我々にとつて魅力的なものであることをやめない。それは、後の私の議論に示されるように、共同体説を成功させるといことが、知らず知らずのうちに我々が絡め取られてしまう二つの罠、すなわち、コミュニケーションを他人が口にする言葉の背後にある心的で私秘的な何かについて仮説——原理的に決して立証されることのない仮説——を互いに立て合うこととして捉える言語像と、意味ないし規則を極度に神秘化してしまう或る種の實在論から、きつぱりと身を引き離していられる見地を確立することだからである。言語理解の徹底した脱神秘化を目指す者にとつて、共同体説は、ともかくできるところまで固執してみただけの価値を持つているのだ。——私もこれから、それを試みようと思う。この小論は、共同体説の陣営がどこまで頑張るか、どういう形態の共同体説なら維持できるかを探る私の作業の手始めである。

共同体説を支持する者の常として、私も、ワイトゲンシュタインに共同体説を帰す陣営に与しようと思う。ただし、ワイトゲンシュタイン解釈上の問題にはここでは深入りしない。それは、遺憾ながら、深入りしても実質的な実りが得られないからである。ごく率直に言つて、とりわけ共同体説を彼に帰すか帰さないかという点に関しては、私は自分の論拠として、不毛な水掛け論の引金になるようなもの以上を提出できないのだ。<sup>11</sup>

さて——。

Dテーゼ… 人が規則に従っていることと、従っていると信じているだけであることの区別は、共同体の成員相互の一致（同意）に訴え得ないところではなされ得ない。すなわち、人はこの区別を私的に行うことができない。

これが、共同体説の核心をなすテーゼである。以下の私の議論は、常にこのDテーゼを中心に動いている。共同体説を擁護するということは、Dテーゼの不能性の証示と称されるもの、あるいは反証と称されるものに対して反批判を試みることであり、その妥当性と有効性の証示を試みることにほかならないのだ。

## 2

「それゆえ、『規則に従うこと』は一つの実践である。そして、規則に従っていると信じていることは、規則に従っていることではない。だから、人は規則に『私的に』従うことができない。さもなければ、規則に従っていると信じていることが、規則に従っていることと同じになってしまうからである。」<sup>12)</sup>——論争の焦点となっている『哲学探究』第一部202節である。私自身も含めて、共同体説をワイトゲンシュタインに帰す人々は、ここでDテーゼが主張されていると考える。実際、或る言葉の適用に際して、私ができる限り慎重に行動するならば、たとえそれがどんな行動であろうと、私には常に、その言葉の使用の規則に適っているように見えるだろう。しかるに規則とは、私の行動を或る定まった仕方へと拘束するものである。これは規則という觀念の定義に属することだ。それゆえ、私が規則に従っていると信じていることから独立に、規則に従っているということが成立するのではなければならない。そして、それを成立させることは、私を「私的に」——すなわち単独で——行動する者にしておく限り不可能である。その成立は、私が共同体の一員として行動することを要求する。すなわち、共同体の成員達が一致して示す行動に私の行動が合致し、彼らが私を承認するということにおいて、「規則に従う」という觀念が、自分は規則に従っていると私が信じていることから独立したところで働くようになる。——こういった見解がこの202節に約言されている、とワイトゲンシュタインに共同体説を帰す人々は（そして私は）考えるわけである。こう考えることは、ここでの「実践」という語を、共同体の実践を意味するものと解する、ということを意味する<sup>13)</sup>。後に述べるように、

共同体説をワイトゲンシュタインに帰すことに反対する人々は、この解釈は成り立たないと主張する。

さて、おそらくはここで、「私ができる限り慎重に行動するならば、たとえそれがどんな行動であろうと、私には常に、その言葉の使用の規則に適っているように見えるだろう」という言い方は不当である、人が或る規則を把握しているならば、彼はその規則に拘束された一定の仕方で、行動するはずだ、——と反論したくなるのが、我々の自然な傾向であろう。しかし実は、こうした反論が有効であるとおよそ考え難いのである。そのことを示すのが、「懐疑的パラドクス」という命名のもとにクリプキが再構成したことによって一躍有名になったワイトゲンシュタインの議論である。

クリプキに従えば、「懐疑的パラドクス」は、言語の諸規則の把握と呼べるもの、すなわち、言葉の適用に際して私を導くもの（適用を統制するもの）が私に備わる——想起可能なものとして私の心に宿る——ということは原理的に不可能であり、それゆえ、我々が「何らかの言葉で何がしかを意味する」といったことはあり得ない<sup>14</sup>、という驚くべき帰結を導くものとされている。言葉の適用において自分を導いているものとして、私が自らに呈示し得るのは、その規則の解釈（説明）に類するものに尽きる。すなわち、私が或る言葉の適用においてこれまで従ってきた規則がどのようなものであるかは、①言語的表現によつて（典型的にはその定義というかたちで）説明されるか、②その規則の過去の適用事例を掲げることによつて説明されるか、である。①の場合、言語的表現が表示しているとされる規則に或る行動が合致するか否かの判断は、その言語的表現を自分がどう解釈しているかに完全に依存している。そして、或る言語的表現についての自分の解釈を確定する手続きは、最終的には、何らかの基本的な言葉について、自分がどういふ規則に従つてそれを用いてきたかを、過去のその適用事例を掲げることと説明するという段階に到るだろう。こうして問題は②に一本化される。ところが、或る記号の過去の適用事例を全て並べても、それらを適用の事例とする規則は、文字どおり無数にある。私が過去従つてきた規則は、その無数の規則のいずれでもあり得る。そして今、私がどのように行動しようと、その無数の規則のうちのどれかには合致するし、どれかには合致しない。私が何をしようと、それはしかるべき規則に合致しているとも言えるし、合致していないとも言える。

つまり言葉の適用の導き（規則の把握）と私が考えるものは、実は私の行動を全く導かない（拘束しない）のだ。<sup>(15)</sup>

けれども、ここで共同体説を導入すれば、すなわち、人々によって行動を承認されたり訂正されたりする環境の中に私を置いてやれば、状況は変わる。共同体による承認および訂正という営みが、規則による拘束という観念の働く場をもたらすのである。とはいえ、共同体の誰一人として、規則の把握と呼べるものを持っていないのだが、クリプキの考へでは、こうした共同体説の導入は、パラドクスに真正の解決を与えるものではなく、そのダメージに対する一つの「補償策」を——すなわち、クリプキの表現によれば「懐疑的な解決」を——を与えるものであるという。<sup>(16)</sup>

マルコムは、クリプキが「懐疑のパラドクス」として構成した議論に概ね合致するものがウイトゲンシュタインの考察に含まれていることを否定しない。だがマルコムによれば、ウイトゲンシュタイン自身は、それを回避不可能な真正のパラドクスとは考えていないし、それゆえ、彼の共同体説は「懐疑的な解決」などではないのだという。マルコムの見るところでは、ウイトゲンシュタインの見解は、こうしたパラドクスを引き起こすことにおいて、規則把握とは行動を導く何かを心に宿すことだとする考えは誤っている、というものである。つまり、これは誤解が引き起こしたパラドクスである、ということだ。クリプキの目にそれが真正のパラドクスに見えるのは、まさにウイトゲンシュタインが誤解であるとしている「心の中の導き」という考えに彼自身が固執しているからだ、とマルコムは言う。<sup>(17)</sup>——実際、ウイトゲンシュタインのテキストは、この点に関してマルコムを支持しているように見える。<sup>(18)</sup>しかしながら、我々には、ここで安易にマルコムに軍配をあげることができない。この点は慎重を要する。「心の中の導き」という考えは、たしかに維持し得るものではないが、にもかかわらず、規則というものの本質に属する或る重要な点を捉えている。それは、もし人が或る規則の知識を持っているならば、その知識は彼の行動に対して規範的に作用する、ということである。共同体説がこのことに疵を付けずに済むとは考えにくいのだ。もちろん、規則の知識（＝言葉の意味の知識）が行動に対して持つ規範性という我々の観念は、顔面どおりの内実を持つてはいない、との見解をすすんで引き受けるという出方もあるだろう。だがその時、この見解を引き受けるとは一

つの懷疑論に屈することだという考えを押し込むことがはたしてできるだろうか。

しかし、懷疑論への服従の疑惑を払拭し難いとしても、共同体説を採る方が、心の導きが存在するとの見方に固執し続けるよりは、はるかに健全である。この見方への固執は、規則把握（意味理解）を我々の行動に現れることのないものとして個々人の心の中に閉じ込める見方を自らすすんで引き受けることにつながると同時に、規則（意味を超時空的な）しかも我々が接触できる）存在として捉える神秘主義的な実在論に近づくことにもつながるのだ。私が行動において示し得る或る言葉の有限個の適用事例によっては、そこに働いている規則を特定することはできない。（これは先のパラドクスの構成要素をなしていた論点である。）にもかかわらず私の心において何らかの仕方、規則が把握されているとするならば、その言葉で私が意味することを理解できるのは、その把握にじかに接触できる私だけであることになる。そして、他人の把握している規則（意味）には決して接触できないことになる。つまり、我々のコミュニケーションは、実質的には個々人の一人相撲だ、ということになるのだ。もつとも、いかに悲観的なものであろうと、こうしたコミュニケーション像が真実を捉えているならば、それは承認されるべきだろう。しかし、いったいどういう仕方、私の心が規則を把握するというのか。かのパラドクスに直面しつつ、なおも心による規則把握という考えに固執する人は、超時空的などどこかに無限の（そして将来の）全適用を予め決定している規則なるものが存在し、人間の心はそれに接触し得る、という神秘主義的な実在論——あるいは、実在論プラス心的能力についての神秘主義——に赴かざるを得まい。そうした説得力ゼロの見解を引き受けてまで、わざわざこの悲観的なコミュニケーション像を維持しようとする人は、まさか、いないだろう。

共同体説が懷疑論への服従を含むか否かについては、私は今のところ診断を保留しておきたい。ここでは、規則把握とは行動を導く何かを個人が心に宿すことはあり得ない、ということがウイトゲンシュタインによって示された、との確認を行うことで、とりあえず満足しよう。この確認の意義は大きい。心の導きという観念は、人は単独で規則に従い得るという信念——それは我々にとつてむしろ自然な思いなのだが——の、最も素朴な、それだけに強力な支えであったからだ。



この確認によつて我々は、共同体説へと強く促されることになるのである。

### 3

さて、それではここで、反共同体説論者によつて、Dテーゼの不可能性を証示するものとして提出された議論を検討するとにしよう。

Dテーゼは、共同体の同意を、自分が規則に従っているかどうかを個人が決定する際に訴えるべき權威として与える。しかし、ワイトゲンシュタインに共同体説を帰すライト自身が指摘するように<sup>(19)</sup>、ここでは、共同体全体にとつては自らの正当化のために訴えるべき權威は存在しないことになる。これは結局、規則に従っているか否かは我々がどう思うかからの独立性(客観性)を持つていないことであつて、個人の問題を共同体に転嫁しただけのこととも見える。共同体説に反対する人々は、ほとんど先ずここに矛先を向ける。すなわち彼らの言い分はこうである——、なぜ個人から共同体へと規模が拡大しただけで、規則に従っていることとそう思っていることの区別の不在がとがめられなくなるのか。共同体をとがめないのなら、どうして個人をとがめるのか。Dテーゼは、それが個人に対して指摘している困難が共同体にもあてはまることによつて、結局自滅してしまふのではないか。

また、マクギンは、我々は事実として、言語使用における共同規模の間違ひという観念を持つている——すなわち、或る規則が実際に従われていることとそう思い込まれていることとの区別を、共同体全体に適用することは、我々にとつて何ら矛盾ではない——にもかかわらず、Dテーゼにはこの観念を組み込む余地が無いではないか、との指摘を行っている<sup>(20)</sup>。この指摘への応答としてまず言えることは、共同体規模の間違ひの観念を共同体説に組み込むこともできなくはない、ということだ。すなわち、過去に人々が一致して与えた判断を、現時点で一致して訂正する場合、そこに共同体規模の過去の間違

いの存在が語られる、とすることができ。だが、こうした応答は、即座に、現時点で訂正が行われることが過去に間違いがあつたということだ、という論法が共同体について成り立つのなら、単独の個人について同じ論法を用いてなぜいけないのだ、という疑念を引き起こす。単独の個人についてこの論法を用い得ないとすれば、それは、現時点の訂正が正しいというのを正しいと思われ、ということから区別できないからであろう、だが、それと同じことが共同体にもあてはまるのではないか、——反・共同体説の論者はこう言うであろう。

ここで共同体説が直面している困難は、ひとことで言えば共同体全体と個人の相似性である。すなわち、個人に指摘される難点は共同体規模の難点へとアレンジでき、共同体に帰される資格は個人の資格へとアレンジできるように思われる、ということである。これにどう応じるかを考える前に、共同体の成員と単独の個人の相似性を、ブラックバーンが彼独自のやり方で示そうとした議論<sup>23</sup>を見ておきたい。ただしこの議論は、Dテーゼ批判ではなく、むしろDテーゼの前に敗退する共同体説批判である。その敗退を確認することで、私は、共同体説は共同体全体はさておきその各成員を救う、という点をまず固めておきたいのだ。

彼はまず、「徹底してグッドマン化された共同体」なるものを考える。この共同体の成員は、言語の使用において、或る時点から急に相互に食い違い始める——誰もが他の誰とも一致しなくなる——ことになっている。幸か不幸か彼らは現時点までは順調に一致してきている。いずれ、一致は部分的なものであつた、彼らは同じ規則に従っているのではなかつた、ということが判明するのだが、この事実が、現時点の彼らには知るよしもない。このように、過去の一致が将来の一致につながるということができるのは、或る言葉の適用事例をいくらか集積してもそこで働いている規則は確定できない、という先に指摘された事実による。さて、ブラックバーンの議論は、二つの段階からなる。第一段階は、我々自身の営んでいる共同体が「徹底してグッドマン化された共同体」ではないという証拠を出せ、との挑戦である。

これに対しては、そんなものはあり得ない、と聞き直るしかないだろう。これまで一致してきたということを根拠に、こ

れからも一致し続けると結論することはたしかにできない。まさに共同体説は、一致し続けることへの暗黙の期待（暗黙の賭け）が成就され続けることによつて我々のコミュニケーションは営まれてきたし、これからもそうやって営まれてゆくであろう、という見解なのである。論理的には、我々は明日にでも完全な不一致状態に陥り得るのである。しかし考えてみれば、論理的には決して保証されない因果性の觀念に、人間の営為の全局面が完全に依拠しているのだ。規則の觀念もそれと同様だ、ということ承認するのに、直観に反するということ以外の障害があるだろうか。

だが、共同体説がこういった開き直りで彼の挑戦から逃げられるのなら、同様の開き直りによつて、単独の個人を、規則に従うことは不可能とされる境遇から脱出させることもできる、とブラックバーンは言う。これが、彼の議論の第二段階である。彼は、共同体の各人を、過去から現時点までの諸時間切片における単独の個人に対応させる。そして、共同体の成員に、全く根拠なしに——ただこれまでのところ一致してきたというだけで——自分達は或る同じ規則に従っているとみなす、権利があるのなら、単独の個人にも、現時点において自分は或る規則に従っており、それは、過去の諸時間切片における自分が従ってきたものと同じである、と根拠なしにみなす、権利がある、と言う。そして、もしその権利を単独の個人に認めないのならば、共同体の成員に先の権利を認めるいわれもない、と言うのである。

さて、これに対して共同体説の陣営から言えるのは、個人が共同体の同意を權威として持つか持たないかという違いは、ブラックバーンが言うほど無意味ではないということである。共同体の同意が手に入る状態にある個人は、自分は規則に従っているという思いの外で成立している強制として、規則についての語りが機能する、それゆえDテーゼが要求する区別が成立する環境の中に身を置いている。そして、共同体との交渉を遮断された個人にとつてはこれが成立しないのだ。この差異の存在は、共同体の「徹底したグッドマン化」の疑いを晴らせなくともポイントを失なわない。

では、最初の共同体全体と個人の相似性の指摘に対してはどう答えるべきか。——ここで、共同体全体が言語使用における思いの外からの強制を受ける必要が果たしてあるのか、と問うてみよう。個人は、他者とのコミュニケーションに参加し

ようとすると限り、そのために強制を受けなければならない。だが共同体は何のために？——客観的な（思、いの外にある）何かとしての規則に適うために、としか言えまい。しかし、その客観的な規則なるものに我々は接触できるのか？——できる、と主張しなければ反論者としては意味があるまい。そして、我々の心がそれを成し遂げるのだ、と主張せざるを得ない。だが、こう主張する実在論的な見方は、先にも述べたとおり言語理解を極度に神秘化してしまう。<sup>(22)</sup>個人にとつての思、いの外から強制という性格のみを規則に与えるDテーゼは、こうした神秘主義的な実在論に耽けることを拒否しながら、なおかつ規則による思、いの外からの強制という観念を保持すべく、それをコミュニケーションを営むという人間的事実の中に位置づけようとするものなのだ。

4

Dテーゼに対する反証として提示されている議論についての検討に移ろう。

もし、反共同体説が正しいとすれば、共同体から隔絶された個人にとつても、規則に従っていることと、そう思っているだけであることの区別を可能にするものがあるのではなければならぬ。はたしてそうしたものがあるか？ あるいは、それこれウイトゲンシュタインの言う「実践」(2の冒頭)である、——彼に共同体説を帰さない人々は口をそろえてこう言う。彼に共同体説を帰す人々が、この言葉を共同体の実践——公共的な実践——の意味に解するのに対して、彼らは、個人的／公共的を問わないものと解するのである。彼らによれば、人々の一致が規則の理解という観念にとつて本質的だとウイトゲンシュタインが語るのは、共有された言語の規則の理解を問題にしている場合に限られている、<sup>(23)</sup>という。

ウイトゲンシュタイン解釈上の論争に深入りすることは、ここでは避けたい。私にとつての問題は、個人的実践は〈規則に従うこと〉と呼び得る事態の成立を可能にするか、ということである。かくして議論は、「ロビンソン・クルーソー問題」

と称され得る有名な問題に赴くこととなる。

我々のクルーソーは二人いる。一人は、デフォー描くところの無人島に漂着したロビンソン・クルーソー——Aクルーソーと呼ぼう——である。もう一人は、いわば生まれながらのクルーソー、すなわち、誕生から死までを完全な孤独状態で過ごす人——Bクルーソーと呼ぼう——である。反―共同体説の論者は、Bクルーソーはその孤独な生活の中で、言語記号を自力で作り、日々の生活のために活用し得る、と主張する。共同体説の論者は、彼にはそんなことはできない、と主張する。

さて、共同体説の論者にとつては、Dテーゼによつて、孤独に陥つたAクルーソーの独白はもはや言語ではない（意味を持たない）のだろうか。むろんそんなことはない、と彼らは言う。Aクルーソーの独白もまた一種の公共的実践（ないし公共的実践の延長線上の何か）だということを、彼らは示そうとする。ただし、反―共同体説の論者が指摘するように、<sup>(24)</sup> 彼らの説明には、かなり苦しいところがある。しかし、大胆にも我々の自然な考え方に逆つて、公共的実践でないがゆえにAクルーソーが口にするのは言語ではないと主張する、という奥の手が共同体説の陣営には残されている。（といつても、誰もこの奥の手を使おうとはしないが。）いづれにせよ、Aクルーソーの問題にどういふ答えが与えられるべきかは、部分的に、Bクルーソーの問題にどういふ答えが与えられるかに依存している。すなわち、もしBクルーソーに言語創造の可能性が認められるならば（反―共同体説の側に軍配が上がるならば）、当然Aクルーソーにも言語を喋ることが認められることになるだろう。そして、さもなくば、Aクルーソーの問題は独立に扱うべきものとなる。

そこで、Bクルーソーの方から先に検討することにしよう。はたして彼は言語を創造し得るだろうか。——この問題は古典的である。1954年のエイヤーとリーズの<sup>(25)</sup>論争に端を発している。そして、いまだに多くの人々が、かたやエイヤーに与し（言語創造可能論派）、かたやリーズに与して（言語創造不可能論派）論議を戦わせている。たとえばマクギンはエイヤーに与して、Bクルーソーによる言語創造の論理的<sup>(26)</sup>可能性を我々は直観的に了解している、と主張する。彼は、Bクルーソーが、島の沼地を避けようとして、安全な方向を指す矢印を地面に書きつけると考えてみよ、と言う。そして、彼がその矢印

に従つたつもりであるにも関わらず、沼地にでくわしたならば、彼は矢印に誤つて、従つたのだ——後端と先端を取り違えるなどして——と悟るだろう、と言うのである。ここでマクギンは、Bクルーソーが実際に規則に従っているということ（そう思う、ということではなく）、そして実際に規則に反しているということは、行為の結果——目的が成就されたか否か——に現れると考えているのである。

これに対してマルコムは、言語を持っていないBクルーソーにいったいどうやって矢印を或る仕方で見ようと思いつくことができるのか、との問いを突きつける<sup>(27)</sup>。その思いつきの内容を意味するための言語を、前提によつて彼はまだ持っていないのではないか、というわけである。マクギンの議論は直観に訴えるだけの非力なものである。しかし残念ながら私は、マルコムの指摘も決定的とは言えないと思う。たしかに、人間の思考能力を言語使用の能力に同化する考えには、かなりの説得力がある。しかし一方では、この考えはあまりに短絡的なのではないか、という疑念を払拭することも、決して容易ではないと思うのだ。また、マルコムのこの指摘は、マクギンの例に示されているDテーゼ否定の論拠、すなわち、規則に従っていたか否かは行為の結果に現れるという論点に対する直接の反撃ではない、という点にも注意されたい。

マルコムには失礼ながら、私は（共同体説の支持者として）、一旦ここでBクルーソーが矢印を用いることを思い、つくと仮定してみよう、と提案したい。私としては、Bクルーソーがさまざまな目的の成就のために膨大な印を次々に作り出し、それを用いる、ということまで仮定してしまつてもかまわない。どれだけ精密に作られていようと、そうした一群の印は言語もどきにとどまり、決して言語にはなり得ないからである。なぜなら、ここでも実は、彼が規則に従っていると思つていることから独立に、規則に従っているということを成立させることができないからだ。すなわち、実際に規則に従っている／反しているということは、行為の結果——目的が成就されたか否か——には現れないのである。

私が、さまざまな船に荷を積み込む作業に携わるとしよう。個々の船の安全にとつて一番いい位置に喫水線が来る積載重量が、私に教えられている。私はいつも、積荷の重量を一つ一つ調べ、それを足し合わせて、その総重量が教えられた数値

に近似するように努める。ところが、私の計算は正しいと判断される——誰もが正しいと認める——のに、喫水線が適切な位置に来ないということがしばしば起きるとしよう。私や私の仲間、それを不思議がるだろう。喫水線が予想より下がってしまうのは、積み込み作業中に泥棒が荷を盗み出しているからではないだろうか、また、予想よりそれが上がってしまうのは、大勢の密航者が船の中に潜んでいるからではないだろうか、などと我々は考えるだろう。私がここで強調したいのは、目的（この場合は喫水線を適切な位置にすること）を成就できなくても、我々は必ずしも自分が間違っていたとは判断しない、という当然の事実である。目的が成就されなかった場合、我々には、それを不思議がる時と、自分の間違いを認める時とがあるのだ。すなわち我々は、自分の計算は正しいという判断を、それが結び付いている目的が成就されたという事実的な証拠によって正当化するのではないのである。計算という観念の定義に属することとして、計算を何かの目的に役立てる場合、それが正しいか否かは、その目的が成就されたか否かということから全く独立に決まるのでなければならぬ。もちろん、正しい計算をしなければ多くの場合目的は成就されない、というのは事実である。だが計算は、何の目的のために役立てなくても、正しかったり誤っていたりするのだ。何かの役に立つということは、計算の正しさにとって、外的なことなのである。そして私の計算の正しさは、私が計算を行う共同体に属することにおいて成立する。私一人では、正しいと思うことしかできない。むろん、こうしたことは、計算だけでなく記号を用いる営み一般について言える。

あるいは、私一人しかいなくても、目的が成就されなかった場合はその原因を調査してみても、それが見つかれば自分は正しかったとし、さもなければ間違っていたとする、という手続きを用いることができるのではないかと、と言われるかもしれない。だがこの意見は、規則という観念を全く誤解している。船の喫水線が予想された位置から大きく外れ、しかも、できる限り手を尽くしても総重量を変化させた原因が見いだせなかったとしよう。だがそれでも、私が行った船の積荷の総重量の計算は、依然として正しいものとして認められ得るのでなければならぬ。規則に従っているか否かを、偶然的要因によって左右される我々の調査結果によって決定されるべきものとする、規則という観念はその本来の機能——論理的必然性、

規範性の担い手としての機能——を失ってしまふ。規則に従っているか否かは、事後的証拠を介してではなく、基本的には、端的に判断されなければならないのだ。そのような性格が、まさに「規則に従う」という觀念に求められているのである。そして我々——共同体説の論者——は、この觀念がその性格を持ち得るためには共同体が必要となる、と考える。すなわち共同体説は、人々の一致を、規則に従うことに関する事後的証拠として導入するものではない。共同体説の見解は、人々はまさに何の事後的証拠も介さず、端的に、或る行動が規則に従っていることを一致して認める、そして、そこで人々が一致するということが、事後的証拠に基いて認められるのではない種類の判断の正しさ、すなわち、規範（どうあるべきか）に適うこととしての正しさの觀念に、働く場を与える、——というものである。

かくして「規則に従う」という觀念が目的の成就という觀念から切り離され、Dテーゼが維持されることが示された。我々はいまや、マクギンのBクルーソーに自分の作った印を用いて目的を成就することができたとしても、自分が規則に従っているということを知ることができない、と主張できる。Bクルーソーには自分は規則に従っていると思う、としかできない、と言える。（規則に従うことが——それゆえ言語を喋ることが——できないのに、Bクルーソーにはそう思う、ということができるとか、などと私に問わないでほしい。私の意見はともかくとして、矢印の使用を言語なしに思いつくことのできるマクギンのBクルーソーならば、言語なしにそう思う、ことぐらい何でもないことだろう。私は、言語なき思考があるという、マルコム拒否したマクギンの暗黙の前提を仮に認めた上で話をしてるのである。）

さて、Bクルーソーによる言語創造は不可能と診断された以上、Aクルーソー（デフォアのクルーソー）は言語を用い得るかという問題は、独立に取り扱うべきものとなった。だが、もしも共同体説が、彼は規則に従い得ない——言語を喋れない——と主張すべきだとしたら、その戦略は既に与えられている。すなわち、反共同体説の論者がAクルーソーにしてやれるのは、自分は規則に従っているという彼の信念を目的の成就に基づかせてやることだけであり、それは、Dテーゼが要求している区別をもたらすものではない、と指摘すればいい。実際、共同体説の完結性のためには、Aクルーソーから言語を



奪うこともやむを得ないのかもしれない、とも思われる。しかし私は、性急にここでそう主張しようとは思わない。この点については、今のところ態度を保留させていただきたい。

.....

ひとまずここで議論を終えることにしよう。だが、見てのとおり、私はまだ、共同体説の輪郭を堅める上でも幾つかの点で判断を保留している。また実際、共同体説への諸反論をじゅうぶんに網羅してもない。最初に述べたように、小論は共同体説の可能性を探る私の作業のほんの手始めであって、本格的な考察はまさにこれから始まるのである。

## 註

- (1) Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language* (Basil Blackwell, Oxford, 1982). 黒崎宏訳『ヴァイテンマンシュタインの「パラドキシムス」』(産業図書、1983)。
- (2) Norman Malcolm, *Nothing is Hidden* (Basil Blackwell, Oxford, 1986), p. 157.
- (3) Norman Malcolm, op. cit., p. 157. ここでは取り扱わないが、ヴァイテンマンシュタインにおける「規則に従うこと」を巡る考察と私的言語批判との関係についても、論者達の間には、複雑な見解の対立がある。
- (4) Crispin Wright, *Wittgenstein on the Foundation of Mathematics* (Duckworth, London, 1981).
- (5) John McDowell, 'Wittgenstein on Following a Rule', in *Synthese* 58 (1984).  
永井均訳「規則に従うこと」(『現代思想』1985, 12)。
- (6) Christopher Peacocke, 'Rule-Following: The Nature of Wittgenstein's Arguments', in S. H. Holtzman & C. M. Leich (eds.), *Wittgenstein: To Follow a Rule* (Routledge & Kegan Paul, London, 1981).
- (7) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Rules, Grammar and Necessity* (Basil Blackwell, Oxford, 1986).

- (8) Colin McGinn, *Wittgenstein on Meaning* (Basil Blackwell, Oxford, 1984). 植木哲也・塚原典央・野矢茂樹訳『ウィットゲンシュタインの言語論』(勁草書房、1990)。
- (9) Simon Blackburn, 'The Individual Strikes Back', in *Synthese* 58 (1984).
- (10) 実際、この点を巡ってマルコムとハイカー&ハッカーの間でかわされたやりとりは、ほとんど水掛け論の様相を呈してしまっている。 Cf. Norman Malcolm, 'Wittgenstein on Language and Rules', in *Philosophy* 64 (1989), 'Malcolm on Language and Rules', in *Philosophy* 65 (1990).
- (11) あのハイカー&ハッカーやマルコムでさえ水掛け論をやってしまうのだから……、とこのことば——註(9)参照——この点については御容赦を頂きたいと思う。
- (12) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen* (Basil Blackwell, Oxford, 1953), I-§ 202. 藤本隆志訳『哲学探究』(大修館書店)『ウィットゲンシュタイン全集・8』(1976)。
- (13) Cf. Norman Malcolm, 'Wittgenstein on Language and Rules' etc.
- (14) Saul A. Kripke, op. cit., p. 55.
- (15) Cf. Saul A. Kripke, op. cit., pp. 17-18.
- (16) Cf. Saul A. Kripke, op. cit., pp. 66-69.
- (17) Norman Malcolm, op. cit., pp. 162-163.
- (18) ウィットゲンシュタインは「我々のパラドクス」は「誤解」に基づくものであったと述べている。 Cf. Ludwig Wittgenstein, op. cit., I-§ 201.
- (19) Crispin Wright, op. cit., p. 220.
- (20) Colin McGinn, op. cit., pp. 188-189.
- (21) Simon Blackburn, op. cit., pp. 294-295. Cf. *Spreading the Word* (Oxford Univ. Press, 1984), pp. 82-92.
- (22) しかし、客観的であるというものは規則の本質に属することではないのか——という我々の思いを押し込むことは難しい。マクダウェルは、規則の客観性という観念を守る実在論的な(なおかつ神秘主義的ではない)共同体説を考え、それをウィットゲン

シュタインに帰している。規則の客観性に疵をつけまいとする彼の姿勢はもともとなものであり、彼の描く裏在論的<sup>1)</sup>な共同体説もなかなか魅力的なのだが、その成功は疑わしいと私は思っている。この点については機会をみつけて詳論する所存である。 Cf. John McDowell, 'Wittgenstein on Following a Rule'.

(23) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Rules, Grammar and Necessity*, pp. 169-179, etc. Colin McGinn, op. cit., pp. 43-55.

(24) Cf. Colin McGinn, op. cit., pp. 194-200.

(25) A. J. Ayer, 'Can there be a Private Language?', Rush Rhees, 'Can there be a Private Language?', in *Proceeding of the Aristotelian Society, suppl. vol. 28* (1954).

(26) Colin McGinn, op. cit., p. 197. マクギンは「生まれながらの孤独者を「ロムルス」と呼んでゐる。私が「マクギンのBクルーソー」と呼んでゐるのは、テキスト上は彼の言う「ロムルス」である。

(27) Norman Malcolm, op. cit., pp. 176-178.

引用文中の傍点は、原文のイタリックに対応する。

邦訳のあるものに関しては、翻訳に際して適宜参照させていただいている。

(本学大学院博士課程・哲学)